



BOOK REVIEW

『マクヒュー/スラヴニー 現代精神医学』
 ポール・マクヒュー, フィリップ・スラヴニー 著
 澤 明 監訳
 A5判 440頁
 ISBN 978-4-622-08689-5 C1011
 定価 (本体7,200円+税)
 発行 みすず書房


 The Perspectives of Psychiatry

 マクヒュー/スラヴニー
 現代精神医学

 ポール・マクヒュー
 フィリップ・スラヴニー
 澤 明 訳

みすず書房

みすず書房は精神医学、心理学の領域で世界の名著の翻訳出版を重ね、この分野で仕事をする人にとってはなくてはならない出版社である。そのみすず書房から久々の精神医学関連の翻訳書が出版された。マクヒュー/スラヴニー著「現代精神医学」(澤 明監訳)である。原著「THE PERSPECTIVES OF PSYCHIATRY」の初版は1983年に出版されており、36年前である。

監訳者澤によると「この書は1980-1990年代に書かれた『精神障害・病気をどのように把握し、考えるかを説明した教科書』である」と位置づけられている。一般的には教科書であれば時代とともに改訂され、新たな知見が書き加えられていくものであるが、本書はある意味「古典」でありながら、今、もっとも重要な課題、すなわち「精神医学の枠組み、精神障害にいかに向き合うか」(澤)を考えるうえで有意義な教科書として登場する。この書が初めて書かれた時代がまさにDSM-Ⅲが登場した時代と重なる点も注目すべきであろう。

著者ポール・マクヒューとフィリップ・スラヴニーは日本語版への序文の中で「医学と精神医学における分類」について次のように記載している。「単にそれぞれの臨床表出に名前を与えるだけの「静的」なやり方ではなく、何とかそれぞれの病態をその成因から因果的に説明、分類をしようとする努力をすれば、それは議論を生むことにもなるだろうが、科学技術などの発展に伴い、新しい発見と改善が期待できるであろう。こうした発展が期待できる「動的」な分類をする努力が大事だと、われわれは提唱している。」ここでいう「静的」はDSM-Ⅲを指しており、最近の脳科学の進展に伴う新たな精神疾患へのアプローチ(分類も含む)RDoCは(この書が出版された当時は影も形

もなかった)まさに「動的」に相当すると思われる。監訳者澤がこの本を今、日本語で紹介するベストのタイミングと記しているのがうなずける。

さて、本書の構成と内容を少し紹介しておこう。本書の構成は6部でできている。第1部「精神医学の診断と説明」は総論に相当する。精神医学の基本問題とも言うべき内容であり、本質的懸念を扱っている。3章から構成されており第1章「心脳問題と精神医学の構造」で取り扱っている3つの基本的な質問とそれに対する著者の考えは大変興味深い。3つの質問とは、1) 精神医学は何を対象とするか、2) 精神というこの生体システムについて信頼性のある評価ができるのか? それらに妥当性を求めることができるのか?, 3) いかにか脳は精神を生み出すか? また同じ章において4つの「観点」(説明原理)から精神障害を考察・分類するとしている。その4つ、すなわち患者さんが、1) 何を「もち」(疾患の観点)、2) 何で「あり」(特質の観点)、3) 何を「行い」(行動の観点)、4) 何に「直面している」か(生活史の観点)についての解説がなされており、その後、第Ⅱ部から第Ⅴ部において、この4つの観点の概念が詳しく説明されている。

教科書は一般的には知識の集積であり、総花的でなければならない。一方、解釈や著者の意見は極力排除するのが常道かも知れない。しかし、それだけだと「読み物」としては物足りない。本書は「考えるための教科書」とでも言うべきか。精神医学の神髄を求めるうえでなくてはならない書である。

樋口 輝彦 (日本うつ病センター名誉理事長/国立精神・神経医療研究センター名誉理事長)